

■ 当面の注目は「12日」と「15日」

昨日（4日）まで行われていた北大西洋条約機構（NATO）首脳会議に米トランプ大統領が出席するとのニュースが事前から流れ、何やら嫌な予感がしていた。そして、結果は「案の定」であった。その言動のすべてがあまりに子供じみていると感じずにはいられない。それが意図的なものであったならば、まさに彼は“稀代の天才”ということになろう。

しまいには、カナダのトルドー首相が案にトランプ批判をしたことに腹を立て、首脳会談閉幕後に予定されていた記者会見をキャンセルする始末。会見などなくても、ツイッターで毎日毎日好き勝手に発言するから、市場は結局「今日は何が飛び出すか…」と戦々恐々である。

よく言われるよう、昨今は海外ヘッジファンドや世界のディーラーらが用いる売買システムのなかに「協議進展」や「合意」、「関税発動」などといった文言に敏感に反応し、機械的に売買注文を実行するソフトウェアが組み込まれている。むしろ、最近のトランプ氏はじめ主要な米政府高官らの発言ならびに一部メディアのニュースは、あえてカギになりそうな「ワード」を意図的に当て嵌めに行っている感さえある。

とまれ、今週はトランプ米大統領やロス米商務長官らの発言や欧米大手メディアの報道に市場が一喜一憂、付和雷同させられる状況が続いている。3日にトランプ氏が「中国との合意を大統領選後まで待つのも良い考え」などと述べた件についても、なかなか条件面で譲歩しない中国に一段の揺さぶりをかける戦術の一つであることは明らかだのだが…。それにも拘らず、報道を受けた米・日の株価はあまりにも素直に一旦大きく値を下げた。

もっとも、米国株の投資する向きにあっては、ややネガティブなニュースは目先的な利益確定のための格好の口実ともなる。結果的に一旦下げれば、後に「適度なガス抜きになった」と振り返ることになる可能性も大いにあるだろう。もちろん、ひとたび米株安となればドル／円相場も一旦は目線を下に落すこととなる。実際、昨日は東京時間帯に一時108.43円まで値を下げる場面もあり、あらためて200日移動平均線を下抜ける格好となった。

もはや誰もが「12月15日」に注目しており、その結果はギリギリまで判明しないということを前提とすれば、まだ今しばらくドル／円が方向感なくもみ合う展開も続くと見ておかざるを得まい。

その一方、ここもとは「12月12日」について過度にネガティブな評をあまり目耳にしなくなっているような気もする。“みずもの”であるところの選挙をネタにして、ただ徒に様々な思惑を巡らせて仕方がないということなのであろう。それにしても、特段の売り材料もないなかで足下のポンド／ドルがスルスルと上値を伸ばしてきていることは見逃せない。



左図に見るとおり、ポンド／ドルの週足口ウソクが今週、一目均衡表の週足「雲」を久しぶりに上抜けそうな展開となってきた。それと同時に、週足の「逕行線」も口ウソク足を上抜けてきており、これは紛れもなく強気のシグナルと言える。

相関の強い62週移動平均線を上抜けたのは10月半ばのことであり、以降はずっと底堅く推移してきた。1.3300ドルあたりを上値の目安に短期ロングを検討するのも一法か。

(12月05日 09:30)